

# 「あぶない高齢出産」

産新 8.29

## 中国系企業が参入 格安「出生前診断」に気をつけろ!

医療ジャーナリスト 伊藤準也

+ 本誌取材班

クローズアップされる五個人の高齢出産



国内のダウン症で初めて四年制大学を卒業した岩元健さん(右)

「妊婦血液でダウン症診断  
国内5施設 精度99%、来  
月にも」(読売新聞・八月二  
十九日付朝刊)

悪い意味で、この記事の  
インパクトは大きかった。  
妊婦の血液にわずかに含  
まれる胎児のDNAを調べ  
ることで、ダウン症が九九  
%以上の精度でわかり、他  
にも重い障害を伴う別の二  
種類の染色体の異常がわか  
る。この米国の検査会社シ  
ーケナム社の技術を昭和十  
八や慈恵医大などが導入す  
る。これにより、妊婦の腹  
部に針を刺して羊水を採取  
する羊水検査に比べ、格段  
に安全にわかる。

この記事を嚆矢として、  
メディアはこぞって出生前  
診断の話題を取り上げ、各  
病院には「新型診断を受け  
たい」という妊婦からの問  
い合わせが殺到した。

高齢出産が増加し、メデ  
イアが芸能人の高齢出産を  
過剰に礼賛するなかで、や  
はり今回の新型診断は、技  
術的な安全性ばかりがクロ  
ーズアップされた恰好だ。  
しかし、この新型診断は、  
とてつもなく大きな問題を

はらんでいるのである。

ご存知だろうか。現在の  
日本で、羊水検査などの出  
生前診断において胎児のダ  
ウン症が判明した人の約九  
割が中絶という選択をして  
いる、という現実を。

現在は羊水検査の実施率  
は低く、全妊婦の1%程度  
に留まっている。だが、三  
十五歳以上の高齢出産の増  
加と共に、出生前診断の件  
数は増加しており、中絶件  
数もそれに伴って増加して  
いるのだ。

だが、大前提として、出  
生前診断の本来的な目的は、  
胎児の異常を事前に診断  
し、早期の治療や教育に役  
立てようというものである。  
出生前診断の一つである  
超音波診断の専門家で、胎  
児医学研究所の医師、篠塚  
重男氏が話す。

「例えば超音波診断で、心  
臓の疾患が発見された場  
合、出産後の手術で治療で  
きる可能性などを説明した  
上で、適切な施設や医師を  
紹介するなどして、診断後  
の道筋を付けてあげます」  
ハイリスク出産が増えて  
いる現状で、命を賭けてで

も出産すると決断した妊婦  
たちを支え、あくまで正し  
い。出口を見つめるため  
に出生前診断はある。

さらに「新型診断」は報  
じられているような、万能  
の診断ではないという。  
医療関係者が説明する。

「九九%」というのは誤  
った数字です。検査の技術  
面から考えて確定診断には  
なり得ない。しかし、イン  
パクトが大きかったため

## 4万円検査で日本進出を画策

そもそも日本の医療界  
は、生命倫理的にも非常に  
デリケートな。この新型診  
断の導入について、それこ  
そ恐る恐る、龜の歩みで検  
討を始めたばかりだった。  
シーケナム社が開発した、  
この新型診断が注目を集め  
たのは、今春、マイアミで  
開かれた国際出生前診断学  
会だった。同社はこれまで  
に約一万件の検査を行って  
いる。検査費用は一件につ  
き、日本円で約二十一万円。

リスクを伴わず検査ができるという新型出生  
前診断。一部の医療機関はそれに飛びつき、  
生命倫理の議論も疎かのまま導入に突き進む

に、数字が一人歩きしてし  
まった」

だが、新型診断の導入に  
向け、一部の医療機関は性  
急な動きを見せている。  
例えば、国立成育医療研  
究センターでは、検査導入  
を議論する院内の倫理委員  
会で、三回目にしてようやく  
反対意見をねじ伏せ、十  
月九日に計画を通過させた。  
今後、実験的に検査を行う  
臨床試験を予定している。

学会での発表などを受け  
て、この新技術について日  
本医療界でも日本人の母体  
血を使って臨床試験を始め  
るべきではないか、という  
議論が水面下でスタートし  
たばかりだったのだ。  
ではここに来ての慌ただ  
しい展開は何なのか。

全く知られていないこと  
だが、そこには価格破壊と  
も言える費用で、同様の検  
査を提供しようという中国  
系検査会社の日本進出があ

るのだ。そして今回の取材  
で、その背景には「ダウン  
症の治療費をとにかく削減  
したい」という中国の乱暴  
ともいえる国家的戦略があ  
ることが判明した。

問題の企業とは、中国・  
深圳を拠点とする「BGI  
I」社(正式名称、深圳華大  
基因研究院)。

グノム解析を行う中国最  
大手検査会社である。同社  
は政府機関である「科学  
院」のゲノム関連プロジェ  
クトをほぼ一手に引き受け  
ており、内実は、ほぼ国営  
企業だと考えていい。

じつは八月初旬、同社の  
日本支社であるBGIジャ  
パンが、日本産科婦人科学  
会(日産婦学会)に、秘密  
裏に接触している。

内情を知る別の医療関係  
者が真実を明かす。  
「BGIの話は、新型診断  
の一種であるダウン症の有  
無だけを調べる遺伝子検査  
を、わずか四万円で購入す

るといふものでした。さら  
に「無料でのお試し検査」  
を実施してもいい、という  
提案もあった。要するに日  
本への進出プランを持ちか  
けてきたのです。

ただ、日本で検査を行う  
には準備不足であり、拙速  
だと、日産婦学会側は注意  
したのです。

BGIの薦める遺伝子検  
査は、シーケナム社の新型  
診断とは決定的に違う。B  
GIの検査は、二十一番目

の染色体のみを対象とす  
る。つまり、その胎児がダ  
ウン症かどうかだけを判定  
するのだ。これが圧倒的な  
安価の理由である。BGI  
はこの格安検査を、すでに  
世界で約二十三万件も行っ  
ており、昨年九月には、神  
戸市に日本支社を設立し  
た。同社が日本進出を目標  
んでいることは明白だ。

## DNA情報が中国に流出

日産婦学会は、このBGI  
Iからの接触の事実を明ら  
かにしていないが、実際に  
は向こうに突き動かされる  
形で事態は急展開した。

「BGIに対応したのは、  
日産婦学会の出生前診断に  
関するワーキンググループ  
のトップである横浜市立大  
学の平原史樹教授です。  
彼は一度は申し出を拒否  
したにもかかわらず、一方  
では「中国が入ってくるか  
ら、早く検査を導入すべき  
だ」と、シーケナム社と検  
査の導入に向けて進んでい

た研究者と共に、臨床試験  
開始への動きを加速したと  
言われている。いわば中国  
進出の情報に踊らされたの  
です」(同前)

それをスッパ抜いたのが  
冒頭の記事だったのだ。  
じつは十三億人もの人口  
を抱える中国国内では、ダ  
ウン症の治療費が毎年二十  
億元(約二百五十億円)を超  
えている。それが国家財政  
を逼迫させていると、中国  
は国家的戦略として新型診  
断を積極的に導入し、ダウ  
ン症の子供が増えないよ

うとしてい。だが、その背景には格安検査で  
世界の遺伝子診断を生耳ろうとする中国企業  
の躍進が、日中医療界の暗部に肉薄する前編。  
の染色体のみを対象とす  
る。つまり、その胎児がダ  
ウン症かどうかだけを判定  
するのだ。これが圧倒的な  
安価の理由である。BGI  
はこの格安検査を、すでに  
世界で約二十三万件も行っ  
ており、昨年九月には、神  
戸市に日本支社を設立し  
た。同社が日本進出を目標  
んでいることは明白だ。

「命のスクリーニング」  
を実施しているのだ。およ  
そ日本人の生命倫理観とは  
相容れない、恐ろしい合理  
思想である。

命を軽視するこの隣国の  
遺伝子ビジネスが、まさに  
今、野放図に日本に輸入さ  
れようとしているのである。  
前出の篠塚氏は強く警鐘  
を鳴らす。

「実のところ、BGIが日  
本の医療機関と直接契約を  
結ぶとなれば、それを規制  
する術はありません。新型  
診断は薬事法の管轄外であ  
り、取り締まることは出来  
ません。保険診療にはなり  
ませんが、医師の裁量でい  
くらでもできる。いわば、  
やり放題です。」

加えて、DNAは究極の  
個人情報でもあります。検  
査である母体血のデータは、  
当然、中国本土に持ち帰ら  
れる。日本人のDNA情報が  
がどんどん中国に流出する  
ことになるのです。正直、  
あの国で、それが何に使わ  
れるかは分からない。本当

妊婦血液でダウン症診断  
精度99%、来月にも

読売新聞2012年8月29日付朝刊1面



ならば、この検査は日本の検査会社が、国の認可のもとで行うべきなのです」  
だが本来、この問題の先頭に立つべき厚労省の危機意識は、まったくもって低いと言わざるを得ない。  
前厚労大臣の小宮山洋子氏は、読売の「報」を受けて、八月三十一日の記者会見でこう話している。  
「出生前診断は生命倫理を考へても難しい問題。今は日産婦学会が議論をしているので、当面は見守っていく。今後は連携しながら、必要な対応をしていく。」  
出生前診断については、ガイドラインの発表と臨床試験の導入は同時に発表するべきものだった。しかし、検査の方が先に報道されてしまったので、「学会には「早急にガイドラインを策定してほしい」  
つまり、厚労省は議論を日産婦学会に丸投げしたのである。当の日産婦学会は、小誌の取材に対し、「進行中の案件につき、お答えできません」  
と回答するばかりだ。実際には学会内では指口令が

敷かれているという。これほどの危機的状況にありながら、幅広く議論を行う気がまったくないのである。  
この新型診断は、血液を採取するだけで受診できるため、産婦人科だけでなく小児科医や内科医でも行える。当然、産婦人科だけでなく、医療界全体で議論されるべき問題なのだ。さらに言えば、医療関係者だけでなく、国民を巻き込んだ幅広い議論が必要な「命の選択」を含む問題である。  
「学会の、ほんの一握りの人間が先導しているという、いびつな構造を看過してはならない」  
「日産婦学会は公にしていませんが、彼らの言い分は、この検査が日本に入ってくるのは不可避であり、これを受け入れるためには出生前診断を受ける母親に対して適切な「遺伝カウンセリング」が必要である。そのために新型の臨床試験を実施すべきだ」というものです。しかし、現状でも行き届いていない遺伝カウンセリングを、適切に行えるとは到底思えませ

ん（前出・医療関係者）  
本来の遺伝カウンセリングとは、検査の前後に、検査の特徴やその影響などの情報を提供し、妊婦や患者などが自らの判断に基づいた選択ができるようにサポートするもの。しかし、現在の遺伝カウンセリング体制は明らかに不十分である。山梨大学の中込さんと、教授が指摘する。  
「日産婦学会の主催する検討委員会の考える遺伝カウンセリングとは、検査の結果を知った妊婦には「中絶するか否か」という選択が患者に突きつけられることになる」  
しかし、現在の日本の環境では、「産む」という選択を得ないと言わざるを得ない。産んだ先の「出口」が親にとって非常に見えづらく、現代の日本社会で、ダウン症の子供を産んで育てられるのか。その不安に耐えられるべき遺伝カウンセリングが出生前診断という一面面しか関

心で見えない  
産んだ先の「出口」が見えない  
「検査を受けたのは、不安を抱えて十カ月を過ごすことが精神的に辛かったから。技術が無ければ、受けるかどうか、悩む事はなかったと思います。でも分かるのであれば、知りたい。それが本心です。結果的に子どもはダウン症ではありませんが、ダウン症なら諦めよう、と諦めていたんです。やはり高齢ということもあり、私たちが死んだ後、この子はどうかやって生きていくのか。それを考えると、産むという選択は難しかったと思います」  
彼女が診断を受けたクリニクでは、ダウン症と診断された場合、やはり八割以上の妊婦が中絶を選んでいくという。だが、妊婦たちが正しい知識をもって判断したとは思えない。日本では、産婦人科医でさえもダウン症を正しく理解していない人がいるからである。「ダウン症は数ある先天的障害のなかでも軽度の障害、それが医療界の常識です。その障害も様々で、長生きできるケースも多い」

「検査を受けたのは、不安を抱えて十カ月を過ごすことが精神的に辛かったから。技術が無ければ、受けるかどうか、悩む事はなかったと思います。でも分かるのであれば、知りたい。それが本心です。結果的に子どもはダウン症ではありませんが、ダウン症なら諦めよう、と諦めていたんです。やはり高齢ということもあり、私たちが死んだ後、この子はどうかやって生きていくのか。それを考えると、産むという選択は難しかったと思います」  
彼女が診断を受けたクリニクでは、ダウン症と診断された場合、やはり八割以上の妊婦が中絶を選んでいくという。だが、妊婦たちが正しい知識をもって判断したとは思えない。日本では、産婦人科医でさえもダウン症を正しく理解していない人がいるからである。「ダウン症は数ある先天的障害のなかでも軽度の障害、それが医療界の常識です。その障害も様々で、長生きできるケースも多い」

ダウン症の子供やその親に対しての保護に関して、全く議論がされないまま、検査が導入されてしまうのは非常に危険です」（前出・権原氏）  
そもそも、ダウン症の人が日本に何人いるのか、五万から六万人と言われるが、正確な数字すら分からないのが現状だ。前出の中込氏によれば、実際に妊婦にカウンセリングをする時、母親は驚くほどダウン症の知識を持っていないという。  
「ダウン症が覆たきりだと思っている方もいるほどです。彼らは学校へも行けるし、家族と楽しく過ごせる。それらを妊婦に説明すると、検査をしない方がほとんど

です。裏を返せば、多くの人がそういう認識ですから、今はダウン症の人々を育てている社会ではない」  
その状況で、「夫婦で相談してください」と自己決定を促すのは全く不親切な対応だと思えます。知る権利を押し付けている」  
事実、ダウン症の人々は様々な分野で活躍している。岩元綾さんは、ダウン症として日本で初めて四年制大学を卒業した。  
彼女は今年三十九歳になる。日本語、英語、フランス語の三か国語を操り、絵本の翻訳に携わっているという。筆者の取材に、ゆっくりだが、しっかりと口調で話してくれた。

「実は、私が自分をダウン症だと知ったのは、大学二年生の時でした。父から宣告を受けました。自分がダウン症だという事を、うすうす感じてはいましたけど、実際言われるまでは知らなかった。ショックで、自分の部屋に戻って泣きました。でも、ダウン症があったから今の自分がいるんです」  
今回の新型診断の問題については、「言葉が絞ります。個人としては反対です。偉そうには言えませんが、この検査に対しては、怒りと言うよりも悲しい、やっばり受けたいではないというのがあるんです。私は生き残っている素晴らしいを今、実

感しています。  
ダウン症は個性だという言い方をされますが、私は目に見えない障害だと思っています。乗り越えられない壁だと思っています。その壁が崩れて、優しくなれる社会があればいいな、というのが私の願いです」  
DNAの解析は、まだまだ未知の分野である。今回の新型診断に限らず、もしすべての染色体の情報を調査したところで、その人間がどんな疾患を抱えることになるか、まったくわからない。だが、こういった遺伝子診断により、本来は治療に生かされるべき診断結果が、本来転倒ともいえる

事態を引き起こすのである。現に、アメリカでは遺伝子診断で将来乳がんになる可能性があると診断された女性が、がんを発症する前に乳房を切り取ってしまった。というケースが起きているのだ。  
DNA診断が罷り通れば、遺伝子の優劣で人を判断してしまうことに繋がりがかねない。そこに待ち構えるのは危険な優生思想である。新型診断を我々はどう捉えるべきなのか。そして、この背景にある高齢出産の増加という社会問題をどう解決すべきか。日本の医療、ひいては社会は大きな分岐点に立たされているのである。（以下次号）

文春新書

# 「大発見」の思考法

## iPS細胞 VS. 素粒子

### ノーベル賞受賞大増刷!



# 山中伸弥 益川敏英

生命論、脳の神秘から発想法、日常の勉強術まで  
「世紀のノーベル賞対談本」

文藝春秋

9102-8008 東京都千代田区千代田7-1-2  
Tel.03-3255-1211 http://www.bunshun.co.jp